

=====

◇植物ストレス科学研究ネットワークメールマガジン vol.189◇

2026年4月10日号(第189号)

=====

-----◇◆ INDEX ◆◇-----

1. 岡山大学資源植物科学研究所一般公開のお知らせ
2. 高等先鋭研究院連携プロジェクト・作物遺伝資源×考古学でひらく「農と食の共創進化史」- 研究ワークショップを開催報告
3. 最近の研究成果について
4. 投稿のお願い
5. 編集後記

-----◆◆◆◆-----

1. 岡山大学資源植物科学研究所一般公開のお知らせ

岡山大学資源植物科学研究所では、5月9日(土)に一般公開を開催します。

「きて、みて、発見！！植物っておもしろい！」

- こどもからおとなまで家族みんな楽しめます！ぜひお越しください -

日時；2026年5月9日(土) 10:00 - 15:00

場所；岡山大学資源植物科学研究所

(倉敷市中央2-20-1、JR倉敷駅から徒歩で15分、倉敷市芸文館前)

参加費無料、駐車場あり、所内禁煙、休憩所あり。

大学院進学説明会もあります。

https://www.rib.okayama-u.ac.jp/information/open_to_the_public2026/

<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/wp->

content/uploads/2026/04/2026_public_leaflet.pdf

2. 高等先鋭研究院連携プロジェクト・作物遺伝資源×考古学でひらく「農と食の共創進化史」- 研究ワークショップを開催しました

3月5日、岡山国際交流センターにて、「作物遺伝資源×考古学で拓く農と食の共創進化史研究ネットワーク構築ワークショップ」を開催しました。このワークショップは、高等先鋭研究院連携プロジェクトの一環として、文明動態学研究所と資源植物科学研究所の連携をさらに深め、「農と食」をめぐる人類の長い歩みを新たな視点で捉え直す研究サークルづくりを目指して実施したものです。開催当日は、演者を含め約30名が参加し、小規模ながらも予定時間が足りなくなるほど活発な議論が続く、非常に熱気のある場となりました。

ワークショップは2部構成で、第1部は「遺跡出土種子を活用した多角的アプローチ」、第2部は「考古学・歴史学・遺伝学の協同可能性」という話題に、植物研の教員も含む国内外、学内外から9名のそれぞれの分野の第一線で活躍する9名の先生から話題を提供してもらいました。当日は、遺跡から出土した種子の検討、考古植物学と植物遺伝学の統合、3次元定量解析の可能性といった話題に加え、歴史資料からみた食と農の共進化、AI for Science、古代イネの復刻と利用、熱帯・亜熱帯環境への適応、祖先組換えグラフを用いた栽培化研究など、多彩な発表が行われました。考古学、歴史学、遺伝学、情報科学といった異なる分野の研究者が一堂に会し、それぞれの知見を持ち寄ることで、「農耕の始まり」や「作物利用の広がり」をより立体的に理解できることが強く実感されました。

この連携プロジェクトが目指しているのは、農耕の起源や作物の伝播、さらには調理や利用の多様化までを統合的に捉えることで、現代社会が抱える環境や持続可能性の課題を、人類の文明の歩みという大きな時間軸の中で考え直すことです。今回のワークショップでは、そのために必要な研究ネットワークの手応えが確かに感じられました。今後も、学内外の研究者との連携を広げながら、「農と食の共創進化史」という新しい研究のかたちを育てていきます。

<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/information/20260217-1j/>

<https://ridc.okayama-u.ac.jp/20260210-4674/>

3. 最近の研究成果について

Zhou, Y., Gonzalez, C.A., Manquian, J., Vergara, K., Gajardo, G., Guzman, L., Espinoza-Gonzalez, O., Carbonell, P., Riquelme, C., Ueki, S., Nagai, S., Fujiyoshi, S., Maruyama, F., Yarimizu, K., Uhanie Perera, I., Acuna, J.J., Zhang, Q., Jorquera, M.A.

Microbial communities in coastal seawater during *Heterosigma akashiwo* and *Alexandrium catenella* blooms in Chilean Patagonian fjords.

Marine environmental research, 217:107949 (2026)

Doi.org/10.1016/j.marenvres.2026.107949

Hatvani, L., Hisano, S., Kondo, H., Sugahara, H., Telengech, P., Shahi, S., Ibiang, S.R., Kocsube, S., Kartali, T., Fitzpatrick, D.A., Grogan, H., Suzuki, N.

Virome of the fungi associated with mushroom dry bubble disease.

Virus research, 199714 (2026)

Doi.org/10.1016/j.virusres.2026.199714

Fukuhara, T., Miyashita, S., Suzuki, N., Takahashi, H.

2b proteins of highly virulent cucumber mosaic virus strains are associated with suppression of DCL4 activity.

Plant & cell physiology, pcag036 (2026)

Doi.org/10.1093/pcp/pcag036

4. 投稿のお願い

本メールマガジンやWebサイトでは、植物ストレス科学の研究成果や研究に関する情報の共有を目指しています。

(<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/pssnet/>)

PSSNetメンバーの皆様の最新の論文、関連集会やセミナーの案内、人材募集などの共有可能な情報の投稿をお待ちしております。

ご希望の方は、pssnet-admin@okayama-u.ac.jp宛に情報をお送りください。

また、メーリングリストへの情報提供も随時受け付けております。
セミナーや講演会の開催など、お急ぎの情報は

pssnetml@okayama-u.ac.jp 宛て

にお送り下さい。

* お送り頂く際には、PSSNet に登録しているメールアドレスからお願い致します。

5. 編集後記

令和7年度の卒業・修了に関わるバタバタが終わったと思ったら、もう令和8年度が始まりましたね。本年度もメールマガジンのご愛読よろしく願いいたします。

植物研では昨年度、3名の教員が退職・異動されました。また2名の新入教員（テニュアトラック含む）が来られました。新陳代謝があることは良いことだと思います（私は20年以上ここにいるのですが）。

また学生では、博士前期課程4人（全員日本人）、後期課程3人（全員外国人で前期課程からの進学）の入学がありました。植物研は大学院しかありませんので、13研究室があってもこの程度です。この人数だと、一人の学生に割ける教員のコミットメントを大きくできるとは言え、学生同士の切磋琢磨や研究以外の活動の人間関係が希薄になりがちで、学生さんには少し気の毒な気もします。複数研究室からなるユニット同士でのセミナーや所内でのイベントを通じて、交友関係を広げていただきたいと思います。また教員にしてみると、学生という実働部隊が少なく、自分で実験する人が多くいます。一方で、とある学会の終了後、駅前の居酒屋で隣に座っていた存じ上げない教授グループに乱入して話す機会がありました。とある教授（私立大）のラボでは4-5人の学部生が毎年研究室に分属しますが中国人留学生が多く、修士には進学するが博士には進学せず、毎年学生を捌いているだけで研究が進まないと仰っていました。別の私大では、修士にほとんど進学しないところもあるので、さらにしんどい状況のようです。

うーん、このギャップ、何とかありませんかね。

「植物ストレス科学研究ネットワークメールマガジン」

- 発行日 2026年4月10日
- 発行元 岡山大学資源植物科学研究所
植物ストレス科学研究ネットワーク (PSSNet) 委員会
- WEB サイト <https://www.rib.okayama-u.ac.jp/pssnet/>
メールマガジン登録変更・解除の手続きは
<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/pssnet/Registermember.htm>
をお願いします。

(このメールは岡山大学職員が配信しています)

pssnetml mailing list
pssnetml@okayama-u.ac.jp